

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	鈴木 (橋本) 京子
論文題目	ストレス状況におけるポジティブ志向が精神的健康と幸福感に及ぼす影響		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、ポジティブ心理学の立場から、ポジティブ志向の現れ方に影響を及ぼす要因と、ポジティブ志向が精神的健康の維持や高揚において果たす役割を検討したものであり、全部で9章から構成される。</p> <p>第1章「本研究の目的と理論的背景」では、ポジティブな認知的態度に関する研究、ストレスとポジティブ志向に関する研究、幸福感とポジティブ志向との関連についての研究など、先行研究を広く概観し、本論文の理論的背景を紹介した。</p> <p>続く第2章から第8章までは、質問紙調査法を用いた7つの実証的研究を行い、具体的に検討した。結果の一部において共分散構造分析によるモデル化による実証的検討が行われた。</p> <p>第2章「内容および深刻性の異なるストレスフルイベントにおけるポジティブ志向の現れ方の違い」(研究1)では、12種のストレスフルイベントにおけるポジティブ志向の現れ方を仮想場面を用いて比較検討した。ストレスフルイベントにおけるポジティブ志向は、「コントロール可能性」と「比較により生じるポジティブな認知」の2因子から構成されることが示された。コントロール可能性は、ストレスフルイベントの深刻性が低いほど高く認知され、また、実際にストレスフルイベントを体験した群において、より高く認知されることが示唆された。</p> <p>第3章「大学進学動機、ポジティブな自己信念、大学生活で遭遇するストレスフルな状況におけるポジティブ志向の関連」(研究2)では、大学への進学動機およびポジティブな自己信念と、大学生活の中で遭遇するストレスフルな状況におけるポジティブ志向との関連を検討し、積極的な進学動機(例:能力の向上)とポジティブな自己信念とが正の関連をもち、消極的で非学業的な進学動機(例:周囲の勧め、モラトリアム)とポジティブな自己信念とが負の関連をもち、ポジティブな自己信念は学業や進路に関するストレスフルな状況におけるポジティブ志向と正の関連をもつという媒介的な過程が存在することが明らかになった。</p> <p>第4章「大学生の卒業論文作成時におけるポジティブ志向の現れ方と精神的健康の関連(1)―提出期限1ヶ月前における検討―」(研究3)では、卒業論文提出1ヶ月前の時点における、自己および状況に対するポジティブ志向の現れ方と抑うつとの関連を検討し、「積極的自己」の側面において自己を他者よりポジティブにみなす傾向がみられ、その傾向は大学院進学を予定している者において顕著であることが示された。</p>			

(続紙 2)

第5章「大学生の卒業論文作成時におけるポジティブ志向の現れ方と精神的健康の関連(2)―提出期限半年前と1ヶ月前の比較―」(研究4)では、提出期限の半年前(夏季休暇前)と1ヶ月前(12月)の時点における、自己および状況に対するポジティブ志向の現れ方と抑うつとの関連を検討した。提出期限半年前および1ヶ月前の両方において、卒業論文に取り組む自己の姿勢に対するポジティブ志向がみられ、楽観性、意志の強さ、粘り強さ、情緒安定性に関するポジティブな自己認知と抑うつの低さが関連することが明らかになった。

第6章「楽観性、ポジティブ志向および幸福感の関連(1)」(研究5)では、楽観性、ポジティブ志向、幸福感の三者の関連を検討した。ポジティブ志向は「上方志向」と「平静維持」の2因子から構成されること、および上方志向が楽観性と幸福感の間を媒介し、平静維持は楽観性と正の関連を持つものの幸福感には結びつかないことが明らかになった。

第7章「楽観性、ポジティブ志向および幸福感の関連(2)―ポジティブ志向の方向性の明細化―」(研究6)では、ポジティブ志向尺度が①上方志向、②平静維持、③現状維持、④下方比較(ポジティブ)、⑤下方比較(ネガティブ)の5因子に分かれること、楽観性と幸福感を媒介するのは、上方志向と下方比較(ポジティブ)であることが明らかになった。

第8章「楽観性、ポジティブ志向、幸福感の関連における抑うつの調整効果」(研究7)では、抑うつの程度によって楽観性、ポジティブ志向、幸福感の関係が異なるかどうかを検討した。抑うつ得点が低い者と中程度の者における楽観性、ポジティブ志向、幸福感の関連については、第7章で得られた結果とほぼ同様のものであった。他方、抑うつ得点が高い者については、幸福感に対する上方志向の効果が小さく、上方志向と下方比較(ポジティブ)に加えて、平静維持も楽観性と幸福感の間を媒介しており、現状維持が幸福感に結びついていないことが明らかになった。

第9章「総合的考察」では、第2章から第8章までの研究結果をまとめ、全体的な考察と本研究の意義、および今後の展望、課題が述べられた。ストレスフルイベントにおけるポジティブ志向に影響を及ぼすのは、イベントの性質(内容、重要性)、動機づけ(学業に関するストレスフルイベントの場合は進学動機)、ポジティブな自己信念であることが示された。幸福感の向上に関わる検討においては、ポジティブ志向が楽観性と幸福感を媒介すること、さらに抑うつの程度が調整変数の役割を果たすことが明らかになった。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、「ストレス状況におけるポジティブ志向が精神的健康と幸福感に及ぼす影響」というテーマで行われたポジティブ心理学分野の実証的研究であり、次の3点を特色としている。

(1) 理論的には、マーティン・セリグマン (Martin E. P. Seligman)、エドワード・ディーナー (Edward F. Diener)、シェリー・テイラー (Shelley E. Taylor) らによって20世紀末頃に提唱されたポジティブ心理学 (positive psychology) の考え方を逸早く取り入れて行ったものである。

(2) 本論文の調査対象者は、複数の大学の学生 (7研究の合計1,641人) であり、①大学への進学動機、②学生の日常生活で生じるストレスフルイベント、③卒業論文の作成への対処、④幸福感と抑うつとの関連性、という大学生にとって重要な問題を7つの研究を通じて包括的に検討している。

(3) 方法として質問紙調査法を用いているが、そのデータの分析に当たっては、共分散構造分析 (構造方程式モデル) という最新の統計技法をかなり早期に導入して行っている。

本論文は、全部で9章から構成されている。まず、第1章「本研究の目的と理論的背景」では、ポジティブ心理学の先行研究を広く概観し、その理論的背景を整理する中で、テイラーらの「ポジティブ幻想」の概念の限定性を指摘し、本論文で用いる中心的概念を「ポジティブ志向」に拡張することが規定され、このことによって、本研究の目的が明確にされた。

第2章から第8章までは、質問紙調査法を用いた7つの実証的研究の結果が示され、それぞれについて仔細な検討が行われた。この7つの研究を大別すると、ストレスフルイベントにおける精神的健康の維持に果たすポジティブ志向の機能についての検討 (研究1～4) と、楽観性と幸福感の関連性を媒介するポジティブ志向の機能の検討 (研究5～7) の2グループに分かれる。

第2章 (研究1 ; $N=265$ 人) では各種のストレスフルイベント (「虫歯が痛む」～「親・きょうだいと死別する」) を想定させ、ポジティブ志向尺度を作成して両者の関連性を検討した。因子分析の結果、「コントロール可能性の認知」と「比較により生じるポジティブな認知」の2因子を抽出し、実際にストレスフルイベントを体験することがコントロール可能性の認知を高めることを明らかにした。

第3章 (研究2 ; $N=121$ 人) では、大学進学動機を取り上げ、能力の向上を目指す積極的な進学動機はポジティブな自己信念につながり、さらにはストレスフルな状況におけるポジティブ志向につながることを共分散構造分析によって示した。

第4章 (研究3 ; $N=48$ 人) と第5章 (研究4 ; $N=31$ 人) では、大学生にとって大きなストレスフルイベントになると思われる卒業論文の作成過程を取り上げ、大学院進学希望者の方が「自己を他者よりポジティブにみなす傾向」が強いこと (研究3)、楽観性、意志の強さ、粘り強さ、情緒安定性に関するポジティブな自己認知と抑うつの低さが関連すること (研究4) を明らかにした。

(続紙 4)

第6章(研究5; N=337人)、第7章(研究6; N=352人)、および第8章(研究7; N=487人)では、楽観性、ポジティブ志向、幸福感の関連性を検討する一連の研究を行った。その結果、ポジティブ志向は①上方志向、②平静維持、③現状維持、④下方比較(ポジティブ)、⑤下方比較(ネガティブ)の5因子に分かれ、楽観性と幸福感を媒介するのは①上方志向と④下方比較(ポジティブ)であること(研究5と6)、このことは抑うつ得点が低い者と中程度の者についてはよく当てはまるが、抑うつ得点が高い者では幸福感に対する上方志向の効果が小さく、現状維持が幸福感に結びつかないこと(研究7)が明らかになった。このことは、抑うつの強い者に対する接し方を考える際に大変示唆的な結果である。

第9章では、以上の研究結果を踏まえて、総合的な考察が行われた。

以上のように、本研究は、今後ますます重要性が高まるとされるテーマに取り組み、着実な研究方法と精緻な分析によって多くの成果を上げ、ポジティブ心理学の発展に対して重要な貢献を行うものであり、高く評価することができる。

他方、本研究に対して、試問では次のような問題点が指摘された。

(1) ポジティブ志向尺度の内容、楽観性とポジティブ志向との差異等、概念的定義をさらに洗練する余地があること。

(2) 先行研究で用いられてきた尺度と本論文で新たに開発した尺度との関係についての区分、分析方法、記述にやや分かりにくい点があること。

(3) ポジティブ志向そのものが生ずるプロセスについて、今後の検討が望まれること。

しかし、その他のことがらも含めて、指摘された問題は本研究の価値を根本的に減ずるものとは言えない。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成24年3月27日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降